



爆心の街

第39号

奪われた営み 足跡たどる



両刃草削りを手に発掘作業するジュニアライター

私たちは「両刃草削り」というスコップの先を直角に曲げたような道具で、材木町の盛本さんの家の裏の辺りを掘りました。焼け焦げた木の周りの砂を丁寧に取除いて、そっと持ち上げて、もう一つ一部しか取れませんが、裏は燃えきってなくて木本来の色でした。壁材のような白い色が付いていた部分もありました。曲がった丸くぎや赤茶けたタイルなど家の一部や、緑色をした化粧タイルの破片、青いラインの入った茶碗のかげらなど当時の暮らしが分かるものが出てきます。500円玉くらい大きさのかけらが多く、すさまじい爆風でぐちゃぐちゃになったのかなあ、と思います。意外だったのは食器類。今も使っているようなものでした。普段何げなく歩いている公園の下に、当時の日常生活の一部を実際に見られてときどきしました。

当時の日常 垣間見た

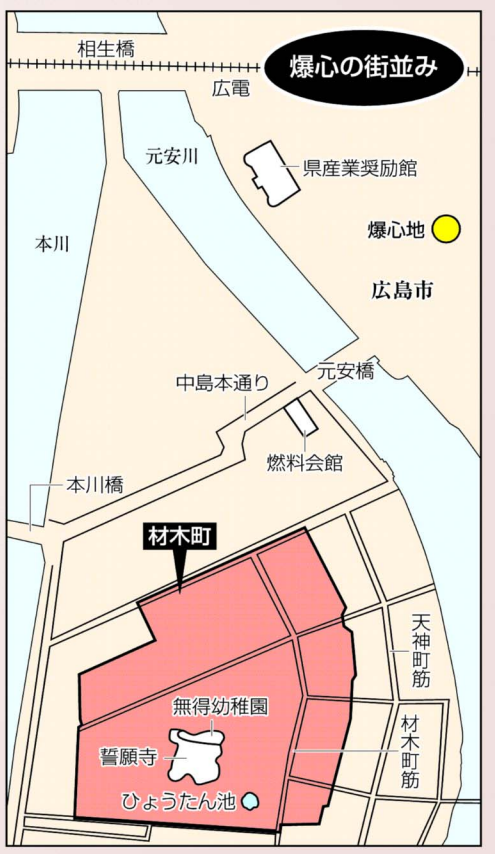
ジュニアライター体験ルポ



爆心地から南西方向の街並み。中央は燃料会館（現レストハウス）で、その手前が元安橋。奥左が材木町（1945年10月、米軍撮影／原爆資料館提供）

資料館の地下 発掘進む

原爆資料館（広島市中区）地下の発掘調査は昨年11月に始まり、資料館の耐震化工事で基礎部分に免震ゴムを入れるのがきっかけです。近代の一般の街並みが調査の対象になるのは珍しく、被爆地という観点で調査しています。被爆した時の地面は70〜80センチ掘ると現れます。茶碗やガラス片を始め、井戸や銭湯の脱衣所のタイル床、下水管など大規模なものまで数多く出土しました。戦艦の描かれた茶碗の破片やビー玉、人形といった、幼い子どもが使っていたであろう生活感あふれる物も見つかっています。被爆前の地図と比べて、実際は



1年間、通いました。戦争末期で、園に遊具は既になく、遊戯会も開かれませんでした。「夏休みもなく楽しいこともなかった」と話します。近くのひょうたん池で申羅士する黒い亀を見たり、近所の元安



町内の幼稚園に通った田中さん

戦争末期 楽しみ乏しく

川で遊んだりするのが楽しみでした。原爆が投下された時、田中さんは疎開先の牛田にいて死を免れました。泣き叫ぶ力もなく死んでいく女学生たちがいる中で、自身も髪が焦げ、腕にやけどを負い、意識を失います。数日後、死体などの強烈な臭いによって目が覚めました。原爆は、多くの市民が犠牲になりました。平和記念公園になつていました。発掘に携わる研究者と被爆者らで一緒に現地を検証することにも、地下に眠る街の一部を残してほしい。そう願います。（中々藤幸歩）



フランクや滑り台、シーソーが並ぶ無得幼稚園の園庭（1942年3月、多田良子さん提供）

溶けた瓶 記憶呼び戻す

原爆資料館地下の発掘調査場 球もしました。所に見つかった山迫裕三さん（81）写真・広島市西区。父が配っていた牛乳の溶けた瓶が出たと聞き、家の場所がはっきりし「良い街だったなあ」と思い返したそうです。原爆が投下された時、中島国民学校4年だった山迫さんは、三良坂町（現三次市）に集団疎開中でした。両親、妹、弟も自宅におらず無事でした。父が9月10日ごろ疎開先に迎えに来て、一緒に帰りました。家のあった場所を掘りました。米も米も黒い炭になりました。今そこは平和記念公園があることについて「電柱が一本でも残っていたら、人が住んでいたと感じてもらえなくて話します。（高1岡田実優）



発掘場所に自宅があった山迫さん



発掘現場で見つかった溶けた牛乳瓶。「高温殺菌全乳」広島牛乳株式会社などの文字が残っている

広島 現物で見て

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を建設する際に発掘作業に携わった元広島大教授の石丸紀興さん（66）写真・広島市南区は、「被爆の痕跡だけでなく、広島長い歴史を現物で見てほしい」と言います。平和記念公園を訪れる人には、被爆前から公園だったと考える人がいるそうです。だからこそ、発掘には価値があるのです。既に発掘されている場所以外にも、公園内を掘れば当時の生活の跡が出るかと考えています。発掘品については、想像しやすい展示を提案。例えば、発掘現場の一部を残し、強化ガラスを用いて上から見られるようにします。「原爆資料館の展示と結びつけることで、資料館を訪れる人がより原爆被害の大きさを実感できる」と説明します。当時の様子が隠れてしまった公園内に、かつての道路跡の表示もアイデアの一つ。「かつてはそこに街があったことを感じ取ることができる」と話します。（高2芳本菜子、中2佐藤西）

